正国寺跡の石仏　三軀

【所　在　地】霧島市隼人町内山田 287 －１　隼人町立隼人塚史跡館
【種　　別】県指定有形文化財（彫刻）
【指定年月日】平成９年４月 21 日

３躯のうち，光背を背負い高肉彫りに彫り出された如来形坐像と菩薩形立像は，いずれも光背前面に康治元（1142）年の陰刻銘があり，製作年が分かる貴重な遺品である。

菩薩形にくらべて如来形は頭部の欠損もあり表面の磨滅がすすんでいるが，いずれも藤原彫刻の形姿をうかがうことができる。この在銘２躯のうち，如来形坐像は本体と二重円光の光背を一石から彫りだし，蓮台は別石としているが，菩薩形立像は舟形光背と蓮台をふくんで一石から彫り出されている。大きさや彫法からも三尊一具の本尊と脇侍２躯のうちの１躯であったことが分かる。もう１躯（写真左側）の首の折れた座像は平安時代の丸彫像として現在残っている例が極めて少ない貴重なものである。背部に背刳りがあり，木彫技法との関係から興味深いものである。

薩摩・大隅の明治初年の激しい廃仏毀釈に，木彫古像をほとんど失った鹿児島県にあって，いずれも貴重な平安仏である。うち２躯は数少ない平安時代在銘仏でもあり，またもう１躯は平安丸彫り石像として希有な作例で，九州の平安時代の仏像のありかたを知る上にきわめて貴重な存在となろう。